

With You

ういずゆう

吉田清彦 (フリーライター)

1944年生まれ。喫茶バーテンダー、喫茶学校講師、飲食専門誌ライターなどを経て、現在、「コマーシャルの会」「確信犯？シングルの会」「Weの会」「メンズリブ研究会」など数多くの市民活動に精力的にかかわる。女性講座などでメディア関係の講座を受け持つ一方、男性講座で「家事としての男の料理」を指導。1995年から、「女と男」「教育と暮らし」を考えるミニコミ「屋台村通信」を発行。著書に『男たちの「私」さがし』（共著、かもがわ出版）などがある。

仮設の“孤独死”と家族幻想

フリーライター 吉田清彦



阪神・淡路大震災から2年と5ヵ月が過ぎた。だが、各所に点在する仮設住宅に今もまだ3万4千世帯、6万人以上の人々が住むことを余儀なくされている。そして、その仮設住宅で兵庫県内だけでも、150人が“孤独死”している。その“孤独死”した人の7割以上が男性で、それもその半数以上を50代、60代が占めているという。

“孤独死”という言葉にはシングル差別のニュアンスが

ことの意味するものを考える前に、“孤独死”という表現に少しこだわってみたい。震災前には単に「病死」あるいは「変死」と表現されていたものが、なぜ“孤独死”に変わったのか？

おそらく、「もし家族と一緒に暮らしていたら家人が気づくので、病院に運ばれて死なずにすんだ」。つまり、「一人暮らしだったから誰にも気づかれずに“孤独”に死んでいった」ということだろう。

だが、この“孤独”という言葉の中には、「一人暮らしは寂しい、哀れだ」「だから結婚しろ」というシングルに対して社会の偏見や脅迫がひそかにこめられているような気がする。

事実、震災後、「家族のありがたさ」「家族の見直し」「結婚志向」などのテーマがさまざまなメディアで繰り返し取り上げられている。

一家の柱は折れるともろい？

ところで、なぜ仮設で、女性より男性の方がより多く“孤独死”するのだろうか。

新聞記事で見ると、彼らが震災前から一人暮らしであったかどうかは分からない。震災をきっかけに一人暮らしになった人も何割かはいるだろう。ともかく、死亡した時点では、ほとんどの人が無職であるのが一つの特徴である。

ここから、いくつかのことが想像される。震災で家をなくし、そして、ある人は同時に家族をなくし、また、仕事を失った。

それまで一家の主として家族を支えてきた人の場合、家や家族や仕事を失うと、それまでの自分を支えていた拠り所を失い、生きる気力をなくしてしまい自暴自棄になる。そんな状態では、仕事を持っていた人でさえ、やがては職を失い、さらに悪循環におちいる。

一人の人間として生きる力を

だが、最初から一人暮らしの経験の長い人は、たとえ男性であろうと、健康管理や近所付き合いなど、一人の人間として生きていくための生活の知恵をさまざまに身につけている。だから、災害時でも周りの人と支えあったりしながら、なんとか暮らしを成り立たせていくことができる。

「家族幻想」や「男らしさ幻想」を捨てれば周りの人の力を気軽に借りることもでき、もっと素直にもっと気楽に生きていくことができる。「家族幻想」や「男らしさ幻想」を強く抱いている人ほど“孤独死”の可能性を備えていると言えは言い過ぎだろうか。

